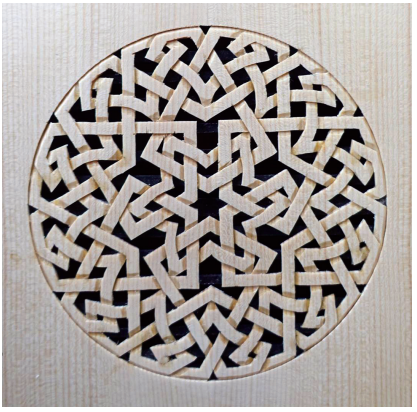
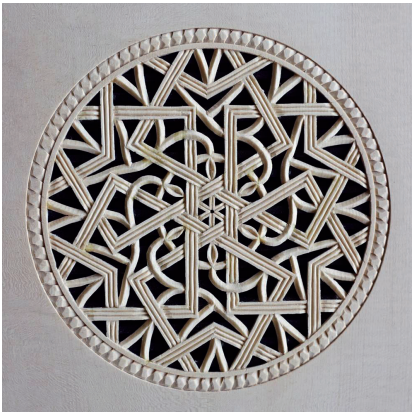
作品

《ジャーマン・バロックリュート》紀井利臣作

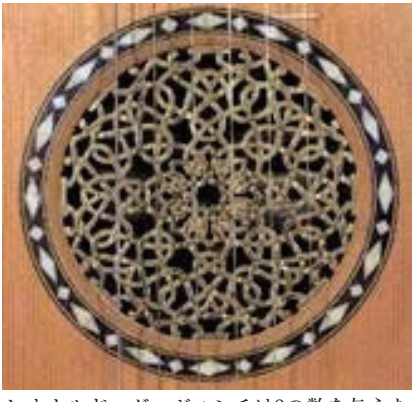
さまざまなロゼッタ模様（紀井利臣作）



6と4の基本形のロゼッタ模様



具象的な蔦の曲線との組み合わせ



レオナルド・ダ・ヴィンチは8の数を与えた

表紙図版解説

薔薇の花飾り

13～16世紀、西欧で流布したリュートは現在のピアノに相当する楽器であり、王侯貴族から一般庶民にまで愛されていた。それら当時の楽器のサウンドホールには装飾が施されていた。今日の我々には単なる装飾と映るが、当時は特別な意味を持っていた。サウンドホールの中や周りには通常ロゼッタと呼ばれる模様（薔薇の花飾りの意味）が必ず施され、ほとんどの模様が連続した組み紐模様で、通常六角形のシンメトリーで構成されている。これには重要な意味があった。

古代ギリシャのピュタゴラスは、「自然現象には合理的配列と連続との法則があり、その関係は量または数で表示することが出来る」と述べ、それは調和の根本であると述べている。シンメトリーの語源は古代ギリシャ語のシンメトロスであり、その概念は音の調和を振動数の比で表したものである。また、今日のギターの音程を標したフレットの位置は、ピュタゴラスの法則に基づいている。そのような「数的世界観」が造形作品にも表され、現代の幾何学や数学の基礎になっている。サウンドホールに施された美しいロゼッタ模様もその一つの表れであり、このような古代ギリシャの「数的世界観」が西欧の美の理論としてルネサンスまで引き継がれていく。中世のキリスト教を中心にした世界観においては、調和の根本は永遠性であった。当時のロゼッタは四角形と六角形の組み合わせが一般的であり、六という数字は神が世界を作り出すのに必要とした日数であり、完全な調和を意味している。それは「完全数」と呼ばれ、それ自身の約数である一、二、三の和に等しく、オクターブや完全四度、完全五度などの音の秩序、調和でもあった。六角形は自然界においても雪の結晶などにも見られるように万物・宇宙の調和であり、それは正三角形六個の合体でもあり、三角形は三位一体と統一を表す象徴として不可欠な霊的原則であった。そして、四は中世の錬金術において重要な数である。金属はすべて四元素（土、水、空気、火）で構成され、それに乾、冷、湿、熱という四性が作用する状態で物質は構成され、すべて四つの組み合わせで成立するといった「万物の根」であったのだ。完全なポリフォニーは、宇宙の調和であり、音楽は完全でなければいけなかったのだ。その顔にあたるロゼッタはそのような世界観を表すものであり、製作者は完全な美を求めたのである。また、初期キリスト教芸術では「連続性の概念」というものが重要であり、四と六の基本からできるパターンの線は一本から成り、すべての部分がうまく交差することが必要であった。この組み紐のパターンはアラベスク模様に限らず、ケルト模様など世界各地で見ることが出来、その考えは当時の画家達にも影響を与えている。レオナルド・ダ・ヴィンチはそれを発展させ、8という数を新しい解釈として絵画の中で表現し、イタリア、ミラノのスフォルツア城の「アッセの部屋」の天井に8つに絡まる植物の枝として描いている。

［紀井利臣］